



TITLE:

坪井家旧蔵本の洋学資料

AUTHOR(S):

松田, 清

CITATION:

松田, 清. 坪井家旧蔵本の洋学資料. 静脩 1994, 31(2): 1-4

ISSUE DATE:

1994-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37271>

RIGHT:



静脩

1994年9月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 31, No. 2

坪井家旧蔵本の洋学資料

総合人間学部教授

松 田

清

京都大学附属図書館は京都の蘭方医新宮涼庭旧蔵書(新宮本)、美濃大垣の江馬蘭学塾旧蔵書(江馬本)など創設(明治32年)間もない時期に寄贈を受けた貴重な蘭学資料を所蔵しており、昭和初期には当時の新村出館長の尽力により京都の蘭学者辻蘭室の文書、および膳所藩出身の洋学者黒田麴廬旧蔵洋書を加えることが出来た。最近ではこれら館蔵資料を中心とした洋学資料展「江戸期における翻訳の世界」(平成4年12月)が機縁となり、「訳業日乗」をはじめとする黒田麴廬関係資料を一括してご子孫より寄贈していただき、その目録も刊行された。

平成元年2月、日本医学史資料の宝庫である富士川文庫を医学図書館の特別書架で検索中、隣の書架に雑然と排架された未整理本があるのに気づいた。蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」の分厚い写本10冊が最初に目に止まり、手垢でよごれた蘭書を開くと「日習堂塾本」の朱印が飛び込んできた。日習堂は美濃出身の蘭学者坪井信道(1795-1848)が天保三年(1832)江戸に開いた蘭学塾である。その後さらに調べていくと、日習堂の塾頭で嘉永五年(1852)信道の女婿となった大木忠益(坪井為春、号芳洲、1824-1886)の蔵書および芳洲の西洋医学所教授時代、文部省時代、埼玉県医学校長時代の翻訳草稿、芳洲の二男で明治32年京都帝国大学医科大学の創設に携わり、医科大学学長となった坪井次郎(1862-1903)の衛生学関係資料、次郎の長男で京都帝国大学医学部を卒業後、慶応大学医学部を経て小児科医となり、上海滞在中(1932-33)に作家魯迅と交友を深めた坪井芳治(1898-1960)旧蔵の医学書、等々坪井家四代にわたる蔵書と判明した。

この蔵書は洋学史上の貴重資料を多数含み、上記

諸本とも比肩しうるものと考えられたので、十分な書誌的研究を行う余裕を得ないまま、当時京都教育大学におられた末中哲夫教授(現在は早稲田大学大学院)のご協力を得て、とりあえず簡単な仮目録を作成し、手元に置くことにした。上記資料展の際には、この蔵書を坪井本と名づけ、その一部を出陳したことがあるので、展覧者のなかには坪井本の重要性に気づいた方もおられたかも知れない。

本年4月、富士川文庫が医学図書館より附属図書館に管理換えになるに際して、坪井本も附属図書館に移管し、整理登録してはどうかという話になった。医科大学初代学長として奮闘中、明治36年7月41歳の若さで亡くなった坪井次郎の蔵書、父ゆかりの医学部を卒業した子芳治の蔵書であってみれば、寄贈図書の可能性が極めて高いにもかかわらず、残念ながら医学部または医学図書館への収蔵の経緯が明らかでないとの事である。幸いにも坪井家のご子孫と連絡が付き、このたび附属図書館への寄贈をご快諾いただき、その手続きをしているとの事であり、永年眠っていた貴重資料が近く公開されるはずである。筆者はこれまで上記仮目録をもとに書誌調査を進めてきたが、不十分ながら若干の新知見を得たので、附属図書館への移管を機に、日習堂旧蔵書と坪井芳洲旧蔵書に限って、洋学関係の貴重資料をいくつか紹介してみよう。

日習堂旧蔵書

箕作阮甫とともに宇田川玄真門下の双璧と謳われた坪井信道はブールハーフェ『万病治準』の翻訳と診断学書『診候大概』の著述を完成(1826)後、蘭学塾安懷堂を江戸深川に開き(1829)、原書の徹底講読

による厳しい教育によって川本幸民、緒方洪庵を育てた。天保3年(1832)開塾の日習堂でも同じ教育方針のもと、広瀬元恭、杉田成卿、大木忠益(坪井芳洲)、黒川良安、佐渡良益(坪井信良)、鹿田文平、吉木蘭斎らが研鑽した。日習堂は嘉永元年(1848)信道が没すると、信道の長女を娶った義子信良が診療に当たり、養子となった為春が塾生の教育を担当し、安政3年(1856)の地震まで続いた。

坪井本の蘭書刊本18点中、信道の号をとった蔵書印「誠軒図書」を有するものは、フーフェランド『神経熱及びチフスの研究』(1814)、ヘイマンス『一般生理学基礎』(1820)、イスフォルディング『医学教育用理学提要』(1826)、ヤコブソン『ヘルニア帯(leer der breuken)の正しい考察』(1837)、バイエル『オランダ語作文提要』(1839)の5点である。信道の蔵書も塾生に貸し出されたとし、最初の3点は特に手垢で汚れ、よく利用されている。ヘイマンスの表紙には「嘉永六癸丑年三月念八日／平満斯／借読主／布留川氏」「借読主顕堂」の墨書があり、日習堂の門人布留川顕堂の勉学ぶりが偲ばれる。宇田川榕菴の「親和論」は本書の抄訳である。イスフォルディングは宇田川玄真に「伊斯忽爾陳屈教示内外科学徒窮理説」、緒方洪庵に「医家須読理学入門」(1842までに成)、広瀬元恭に「理学提要」(1854)の訳がそれぞれあり、宇田川、坪井一門で重視された教科書であることが分かる。嘉永元年坪井信良が作成した「日習堂蔵書目録」の「蘭書部」をみると、原書50点、写本15が挙げられている。「誠軒図書」を有する上記の蘭書5点はこの目録の原書中「扶氏神経熱」「ヘーマンス原生」「イスホルデンク」「ブレウク書」「バイエル」にそれぞれ対応するものであろう。また、この目録中「沕乙蘭土字書十一本」「沕乙蘭土学語」「扶氏パトゲニー」「アヂアチセコレラ 二本」「マイグリイル解剖」とある原書は、それぞれ坪井本のウェイランド『詳解オランダ語辞典』(1799-1811, 11vols.)、ウェイランド『学術用語辞典』(1846)、フーフェランド『病理学初篇 発病論(Pathogenie)』(1801)、フローリク編『アムステルダムを中心とするアジア・コレラ調査報告集』(1832, 2 vols.)、メグリエ『実践的・理論的解剖学提要』蘭訳(1824)のことであろう。最後のメグリエには「日習堂塾本」の朱印と「マイグリール解體書／二卷之内／千八百二十四年」の挿入紙墨書がある。

蔵書印はないが、日習堂旧蔵蘭書と考えられるも

のに、リシュラン(リセランド)『人身窮理新論』蘭訳がある。標題紙を欠いているが、二巻本(1826)の第一巻 pp.173-590を仮製本したものである。「日習堂蔵書目録」の「リセランド原生 二本」に比定できよう。本書も宇田川榕菴訳「人身窮理書」、堀内素堂(米沢藩医、信道の親友)・黒川良安・青木研蔵(周弼の弟)共訳「医理学源」(1844成)、箕作阮甫訳「人生鏡原総論」、広瀬元恭訳「利撰蘭度人身窮理」の翻訳があり、宇田川、坪井一門でよく使用された教科書であった。

蘭学時代に蘭書は極めて高価なため、筆写本が多く作られ流布した。坪井本にも蘭書筆写本8点が含まれ、そのうち書名が判明のものはフーフェランド『病理学初編 発病論』蘭訳(1801)、シュプレングル『治療規則概論』蘭訳(1825)、コンラディ『一般病理学提要』蘭訳(1833)、モル及びエルディック編『実践医学雑誌』(1833-1837)(第12巻～第16巻から症例研究論文を抄写したもの、2冊)、モスト『実践薬学辞典』(1843)(薄葉紙本4冊)の5点である。最初のフーフェランドの表紙には「欧羅巴州独乙大醫扶歇蘭度病理論誘道篇」と墨筆大書されており、その原書の所蔵とあわせて、日習堂におけるフーフェランドの重要な位置を物語る墨書といえよう。坪井信道自身に「扶歇蘭土神経熱論」の翻訳があるが、弟子の緒方洪庵は師の勧めで宇田川玄真にも学び、玄真の遺志を継いで「原生」(生理学)と「原病」(病理学)を研究、処女作『病学通論』を著した。上記坪井本のフーフェランド、シュプレングル、コンラディはいずれも『病学通論』の原書であり、洪庵はその訳稿を信道に送り校閲を受けた。のちに洪庵はフーフェランドの五十年にわたる治療経験を集成した内科書『扶氏経験遺訓』を緒方郁蔵と共訳するが、その訳稿もおなじく師の校閲を得ている。モル及びエルディック編『実践医学雑誌』全25巻(1822-1856)はヨーロッパの主要医学雑誌から症例研究論文を収録したもので、フーフェランドの論文も多数含まれている。箕作阮甫はこの雑誌を元に『泰西名医彙講』(漢訳、1836-1842刊)を編集したが、坪井本の写本にある「蒙爾・越而実吉両先生集輯衆医経験第十年」(1冊)は同誌第10巻(1831)からの抄訳(漢字カナ混じり文)である。

坪井本の写本に「誠軒図書」印をもつ高野長英「驗温器略説」(天保2成)がある。巻末に「辛卯冬 隴月 東奥 高野讓長英述於東都麹街貝阪之寓居」とあり、シーボルト事件後江戸に出て開塾した直後

の訳述である。長英は天保元年(1830)信道に初めて会い、「放蕩を絶し書生を教授し、大都を一震可仕」と語ったという。天保9年には信道夫人(青地林宗の長女)の妹を娶り、義弟となっている。

「日習堂塾本」の朱印を持つフレメリ「化学的製薬法講義」(蘭文写本、八折り判全8冊中存5冊607葉、但し第1巻、第2巻、第6巻の3冊欠) *Fremerly, N. C. de, Dictaten der chemisch-pharmaceutische bereidingen*. は坪井本の中でも特に貴重な資料として注目すべきものである。フレメリ(1770-1844)はオランダにおけるラヴォアジエ化学導入に功績のあったユトレヒト大学教授(1795-1840)で、医学、化学、薬学、自然史を講じた。日本におけるラヴォアジエ化学の導入者宇田川榕菴が参照したラヴォアジエ『化学提要』はフレメリとユトレヒトの薬剤師ウェルクホーフエンによる蘭訳(1800)であった。またフレメリは『バタビア薬局方』(1805)以降の、フルクロワ、ヴォ克蘭、ベルゼリウスなどによる化学の発展成果を取り入れた『オランダ薬局方』(ラテン語版1823)の制定にも参画した。この「オランダ薬局方」のオランダ語版(1826)には洪庵の訳がある。フレメリはこのような翻訳と薬局方を通して幕末の化学、薬学研究に間接的に貢献しているが、筆者が今夏オランダ滞在中に調査したところによると、坪井本の「化学的製薬法講義」はオランダにも写本のない孤本の講義録であり、内容は『オランダ薬局方』の詳細な解説と注釈である。しかも所々不審紙が貼られており、明らかに日本人による研究の跡をとどめている。この講義を3年半受け優秀な成績をおさめたユトレヒト大学の学生にあてたフレメリ自筆の成績証明書が残っており、その日付が1830年4月20日となっている。その後ほどなくして海をわたり日習堂の有に帰したこの講義録を誰が読んだろうか。川本幸民か緒方洪庵か。今後の検討を待たねばならない。

「M.K.moenenoli (ムネノリ)」編 *Aphabetische verzameling van de namen der geneesmiddelen*. (薬名辞彙)は杉田成卿の蘭文序文(嘉永六年三月五日)と編者の蘭文前言(嘉永六年一月)を持ち、第一部(羅蘭和)第二部(蘭和)第三部(羅蘭和)の三部から成る。編者は松本宗則、すなわち松本弘庵(寺島宗則)ではなかろうか。松本は川本幸民に蘭学を学んでいる。幕末におけるこの種の薬名辞彙は他に数種類知られているが、「m.s.kenzoo」(未詳)編緒方三平(洪庵)増補のもの(天保5年成)も併せて相互に比較検討す

れば、日習堂を中心とする薬学研究の発展と各地への普及ぶりをうかがうことができよう。

坪井芳洲旧蔵書

米沢の郷医の子に生まれた大木忠益は天保15年(1844)二十歳で日習堂に入門、弘化4年塾頭となり、嘉永2年折りからの兵学ブームのなか薩摩藩に仕官し、安政元年薩摩藩医として名を坪井為春(芳洲)と改めた。芳洲が修業時代に書き留めた「文帙」(蘭書翻訳ノート・単語帳9綴からなる)は日習堂における教育の実際を知る上で極めて貴重な資料である。芳洲は日習堂で教科書に使用された蘭書だけでなく、「佐久間所持の兵書」からも例文を引用している。

「佐久間」とは天保15年信道の紹介で塾頭の黒川良安からオランダ語を学んだ佐久間象山のことである。

芳洲旧蔵の蘭書としては、ニューウェンホイス『学芸百科事典』全8冊(1820-28)中K-M, R-S, T-Wの端本3冊、および同事典の『補遺』全9冊(1833-44)中、G.-K, L.-O., V.-Z.の端本3冊、ツインメルマン『地球とその驚異』蘭訳(1854-56)、ペレイラ『薬学概論』蘭訳(1849)、ドンドゥルス編『オランダ眼科病院治療教育年報第二号』(1861)がある。最後のものには表紙に松本弘庵と箕作秋坪あて編者の自筆献辞「h^{er}. Matsiki Kowan en h^{er}. Mitsukuri Siuhei hoogachtend aangeboden door F. C. Donders」がみられる。1862年オランダ滞在中の両者に贈られたものであろう。また唯一の英書としてグレイ「解剖書」(1870)がある。

芳洲の堂号と思われる「日新堂」を版心にもつ写本として、蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」10冊、「忽氏薬性論(藥物論)」6冊がある。「ドゥーフ・ハルマ」は日習堂にも一揃いしかなく、芳洲が門人たちに筆写させたものであろうか、写し誤りが朱で訂正してある。文久元年幕府が創設した西洋医学所(文久3年医学所と改名)の教授(薬剂学)として、芳洲は緒方洪庵、松本良順の頭取のもとで勤務した。この時代の訳稿「虎狼痢(ころり)治則」「亜細亜虎狼痢病論」には版心に「西洋医学所」とある。版心に「医学所」とみえる不揃い本の「單涅爾(タンネル)治科各論」は「坪井中博士訳」とあるので、明治2年あるいは4年以降の訳稿であろう。医学所時代の「試業日録」とでも呼ぶべき懐中備忘録は元治元年10月から慶応2年11月までの日付をもっている。「單涅爾薬剂篇付録英国局方」という訳稿の版心には「大学東校」とある。明治5年から7年までの文

部省出仕時代の草稿では、日本語の身体部位名を集めた「体部名」、「丹氏内科新書目次」（「原本紀元千八百七十年米利堅第五版」）がある。「ミユラル氏生理日講紀聞」もこの時代の訳稿と推定される。明治9年から8年間つとめた埼玉県医学校時代の訳稿としては「仁墨爾（ニメル）氏内科書」（肺出血ノ条）と「欧米医学沿革史」がある。その他興味深い写本をあげれば、日蘭修好条約・貿易章程（1858）のオランダ語条文写本には朱で訳語が多く書き込まれており、「西伊勢蔵氏舌病容体書」に対する蘭医デ・マアイル氏の案文は原文と芳洲の訳文（1867年3月1日付け）が綴じられている。

最後に、洋学資料ではないが、芳洲旧蔵と考えられる写本「童観節記」はこの場をかりて是非紹介して置かねばならない。米沢藩の儒医片山元儒（1663-1723、号童観）の編纂した問答体の類書で、全35巻のうち坪井本は「卷之一下、時候類」「卷之二、人

品類、人体類」「卷之四、植物類」「卷之六上、文芸類上」「卷之六下、文芸類下」「卷之十三、経解類下之四」「卷之十五、経解類下之六」「卷之十九、技芸類」「卷之二十一、弁異端類」「卷之下、医学類、ト筮類」「卷外補遺中、雑類」の11冊からなる。これだけ伝わっている例は他にないようであり、貴重である。

坪井信道、芳洲、次郎、芳治という四代の医学者の伝記は、本稿でも参照した仲田一信『埼玉県医学校と日習堂蘭学塾』（1971）、青木一郎『坪井信道詩文及書簡集』（1979）、斎藤祥男『蘭医家坪井の系譜と芳治』に詳しいが、日習堂の蘭学自体は蘭学の本流に位置しながら、これまで余り研究の日があたらなかった。ここに一端を紹介した坪井本の新資料公開によって、日習堂蘭学の解明が進むことを願わずにはいられない。

理学部図書管理システムについて

理学部地球物理学教室技官

麻 生 和 彦

1. はじめに

最近の技術の進歩により、ひと昔前の大型計算機程度の処理能力を持った計算機が、今では低価格になり、誰もが手軽に利用できるようになりました。そのおかげで、いままで附属図書館などの大規模な施設でしかできなかった「貸出・返却・予約の管理」、「利用の統計処理」等の図書業務の電算化を、低価格で高速なワークステーションやパーソナルコンピュータを使って学部・教室の単位でも実現することができるようになってきました。

ワークステーションを使って図書管理システムを構築することにより、(1)電算化にともなう図書業務の簡素化、(2)各教室で行われる処理の分散化、(3)各学部・教室の特徴に合わせた図書管理システムの構築ができるようになります。

しかし現状は、これらのハードウェアにたいしてソフトウェア面では、附属図書館などで利用されている汎用機上で動作する図書管理システムはありますが、ワークステーション上で動作するシステムが用意されていません。

そこで、理学部では OMRON 社が自社向けに開発した図書管理システムをベースに理学部図書システム小委員会が中心となり大学の実情にあったシステムを開発することにしました。

2. 図書管理システムの概要

現在開発中の図書管理システムでできる図書業務の内容は(1)貸出・返却・予約処理、(2)目録検索処理、(3)発注・受け入れ・支払処理、(4)目録入力処理、(5)利用者・蔵書マスターの管理処理、(6)各種統計処理です。

上記の図書業務を実現するための図書管理システムのハードウェアの構成は、以下のとおりです。

(図参照)

ワークステーション	LUNA-II DT2465G
	メインメモリー 8 MB
	内蔵ディスク 250MB
	カセットストリーマ
周辺装置	バーコードリーダー
	2 GB 磁気ディスク
	光磁気ディスク装置
	レーザープリンタ
	DAU
端末装置	PC-9801 BX 2

これらのハードウェアを用意することによって、(1)バーコードリーダーを利用することによって、従来の貸出・返却処理が利用者 ID 番号と蔵書 ID 番号の読みとり操作をするだけでできます。また、利用者・蔵書の更新、削除などの管理業務もバーコードの読みこみによってできます。(2)膨大な量の蔵